



ゆくて遥かに

令和3年2月8日(月)

第144号

長野県松本深志高等学校長

2年生進路講話(2月4日)

国公立大学二次試験の出願が5日に締め切れ、私立大学の入試も本格的に始まり、3年生は臨戦態勢に入りました。コロナ禍の受験となりますが、例年以上に健康管理に注意しながら、最後まで、粘り強く力を尽くしてきてほしいと願っています。



4日のLHRの時間、2年生は進路講話を行いました。講師は信州予備校の田中校舎長と唐澤教頭先生。今年初めて実施された共通テストの分析と対策や、医学部医学科入試の心得などについて、オンラインと対面の併用で説明していただきました。次年度に向けてキックオフです。

書道「刻字」作品集展示(1月21日~)

本校の書道Iの授業で毎年取り組んでいる「刻字」の作品が、2棟の階段踊り場に展示されています。刻字というのは読んで字の如く、木材に文字を美的に刻すことです。紙に筆で書かれている字とは違って、立体的で、彩色なども施されており、工芸や彫刻などのような自由度の高い書道芸術といったところでしょうか。課題は漢字2文字とし、書体を決めてデッサンを行った後、ノミや彫刻刀を使って立体的に彫り、彩色を施して仕上げます。「玄関に飾って似合う文字」というのがテーマだそうで、実際に家の玄関に飾って家族がどんな反応だったか、レポートするところまでが課題なのだとか。



一つ一つの作品には、なぜこの2文字を選んだのか、本人の説明が添えられています。漢字二文字を読んだだけではわからない、様々な思いが込められていることがわかると、作品により深みが増し、その人の人柄や知的センスや優しさといったものが伝わってきます。

斉藤金司先生、自治を語る(1月15日)

深志11回卒業で、母校で国語の教諭として教鞭をとられ、長野県や松本市の教育長を歴任された斉藤金司先生のインタビューが15日の午後、会議室で行われました。斉藤先生のお話の概要を紹介します。(インタビュアーの一人、西村拓生奈良女子大学教授のメモを参照させていただきました)【Q1】斉藤先生の生徒時代、深志の「自治」は、生徒にどのような姿や活動に現われていたと記憶されていますか。また、そのような生徒たちに対して、教師の方々は、どのように働きかけておられたか、ご記憶はありますか。【A1】当時の基本は「放任」だった。先生たちはそれぞれに「自分の歌を歌っていた」。自らの研究、学びを深めることを通じて「生き方を見せていた」。「勉強しろ」なんて一度も言われたことがなかった。「放任」のためには強い意志が必要であった。

辛抱、度量、覚悟を持って「任せる」ということ。「任せる」ことで本物が育ってくる、という強い意志が先生たちにはあった。思春期の生徒ゆえ、当然そこに頹廃も生じる。それを授業の力によって学びへと導くこと。それには時間もかかる。【Q2】教諭としてお勤めの時代、深志の「自治」は、生徒にどのような姿や活動に具体的に現れていたと記憶されていますか。それには、ご自身の生徒時代と比べて何か変化があったと感じておられましたか。もしあれば、その変化をもたらしたものは何であったとお考えですか。【A2】次第に多くの先生たちは「(学問ではなく)生徒を見る」ようになっていた。「学力」が志向されるようになっていた。「深志的なもの」と「反深志的なもの」の対立が深まっていた。それは例えば生徒指導に現われた。「(自分も含めて?)普通の教師たち」が増え、「知を梃子にして自律へ」という深志的なものが弱体化していた。その変化の背景には、世間の価値観の変化があったと思う。県教委の「大学進学率を上げる」方針、教育の「対症療法」化。しかし、生徒たちはよい意味での伝統を受け継いでいた。生徒会、応管、舞装など。授業に対しても、確信犯的にサボる者もいたが、そこにこだわりがある面白い生徒もいた。【Q3】その後、深志以外の高校に勤務され、また県下の教育会を主導するお立場に立たれて、外から深志をどのように見てこられましたか。ご自身の生徒時代や教諭時代と比べて、深志に何か変化があったと思われましたか。また、



深志高校の、あるいは深志のような高校の、社会的な存在意義をどのようにお考えですか。【A3】平成に入ってから長野県の「学力論議」。進学率をさらに気にするようになった。心ある教師たちは波に飲み込まれないように抵抗したが。当時の宮崎教育長は「教育を数字で語るな」と言っておられた。教え子たちが深志の教師になるようになり、その様子を見てみると「深志的なもの」がまた徐々に変わってきたと感じる。「対症療法的」で「過剰」な指導。常に、正しいか正しくないかでジャッジする。人間を作らない。「根っこ」を育てることの大切さ。今の教育は根っこを育てずに花を求める教育になっている。「自治」とは「人権の尊重」ではないか。一人ひとりの生徒の独立性を承認すること。主体的な自己形成を助ける無償の営み。自分の深志の教師時代の鈴木修校長の部屋に掲げられていた言葉——「耐えることだ、待つことだ、そして深く祈ることだ」。

その他の話題をいくつか

★ 2日の昼休みに、全国高等学校スキー大会（インターハイ）の女子クロスカントリーに出場する2年の根津さんに、同窓会からの激励金と校長からの寸志を手渡しました。目標は「50位以内に入り、去年の自分を超越すること」と語ってくれました。会場は飯山市、地元での健闘を祈ります。

今週の予定（1・2年通常授業、3年後期特編授業）

日	曜日	行 事 等	その他(主に校長動向)
8	月	(前期選抜) 学年会	
9	火	ビブリオバトル バレンタインショー (ダンス部)	管理運営委員会
10	水	職員会	
11	木	建国記念の日	
12	金	学校評議員会 (授業公開) 生徒大会	
13	土		
14	日		
15	月	学年会	公立学校共済運営審議会

